

# AllyWare™ v2.6 Release Notes

August 15, 2024

NetAlly のネットワークテストとアナライザは、AllyWare 共通テクノロジープラットフォーム上に構築されています。この AllyWare リリースノートでは、リリースに含まれる新機能と拡張機能について簡単に説明します。

**一部の機能および拡張機能は指定された製品にのみ適用されることにご注意ください。**

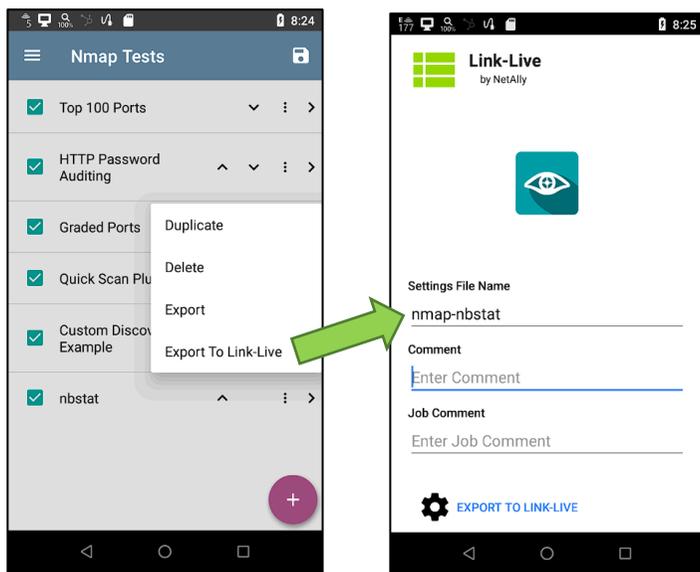
[本リリースノート末尾のソフトウェア・アップグレードの説明を参照してください。](#)

## Version 2.6 新機能と拡張機能

### Nmapアプリの改善

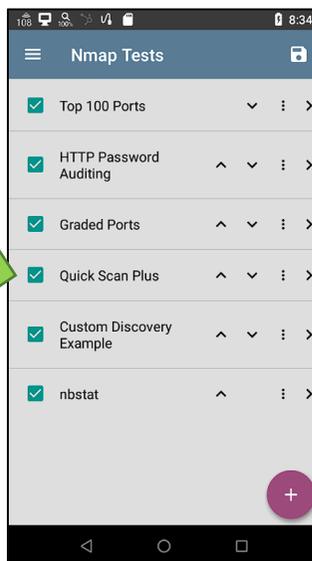
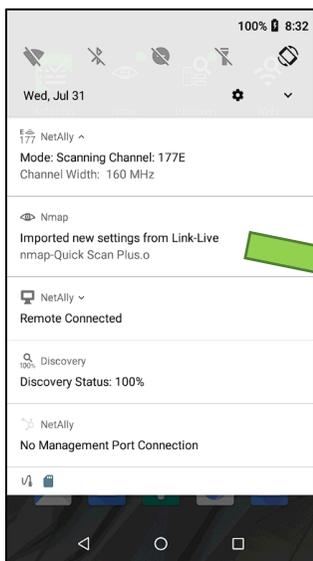
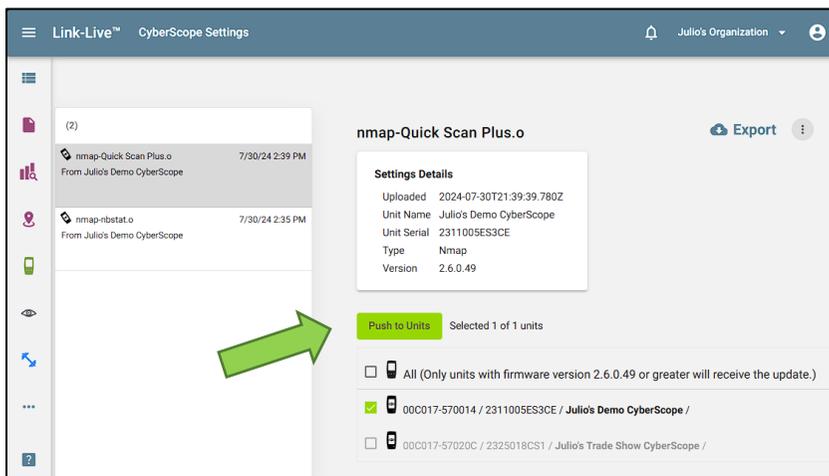
(CyberScope, CyberScope Air, CyberScope XRFIに適用)

- 作成した Nmap テストを他の CyberScope ユニットと共有することが以前より簡単になりました。  
Nmap テストを作成した後、以下のオプションが表示されます：
  - エクスポート - 作成した個々の Nmap テストをユニットの内部メモリに保存し、USB 経由または任意のファイル転送アプリを使用して他のユニットに転送します。
  - Link-Liveへエクスポート - 作成した個々の Nmap テストのコピーを Link-Live にアップロードして、他の CyberScope ユニットに簡単に共有できるようにします。



- 個々の Nmap テストを手動でインポートするだけでなく、Link-Live にアップロードされた Nmap テストを CyberScope に自動的にプッシュできるようになりました。これを行うには、以下の手順を実行します：
  - Link-Liveのアカウントにログインします。
  - CyberScope 設定画面に移動します。

- 共有する Nmap テストを選択します。
- Nmap テストを共有するユニットを選択します。
- [Push to Units(適用)] オプションを使用します。
- Nmap テストが送信された CyberScope ユニットに、新しい設定がインポートされたことを示すポップアップ メッセージが表示されます。
- Nmap アプリに移動し、テストを開始します！



**Note:** Link-Live 経由で他の CyberScope モデルと Nmap テストを共有することは、まだできません。それまでは、エクスポート手順を使用して、USB または任意のファイル共有アプリ経由で、別の CyberScope モデル (CyberScope、CyberScope Air、または CyberScope XRF) を使用しているチームメンバーと Nmap テストを手動で共有できます。

- CyberScope で最新の Nmap スクリプトを使用できるようになりました。サイバーセキュリティスキャナで使用されている Nmap のバージョンが v7.95 に更新されました。

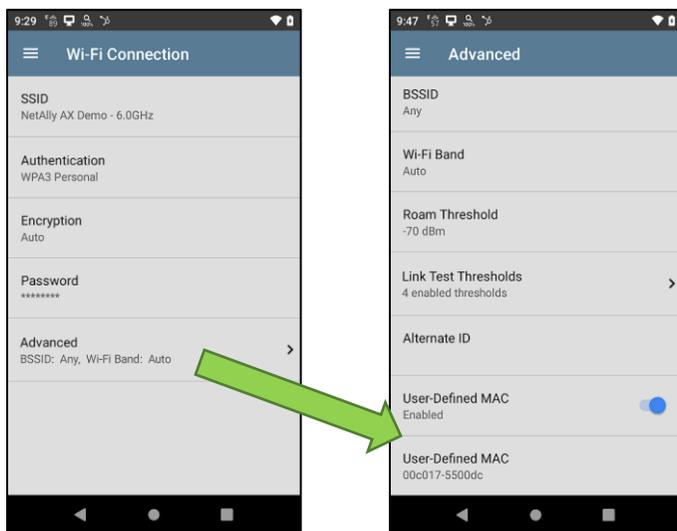
## Wi-Fi 自動テストの改善

(AirCheck G3, EtherScope nXG, CyberScope, CyberScope Airに適用)

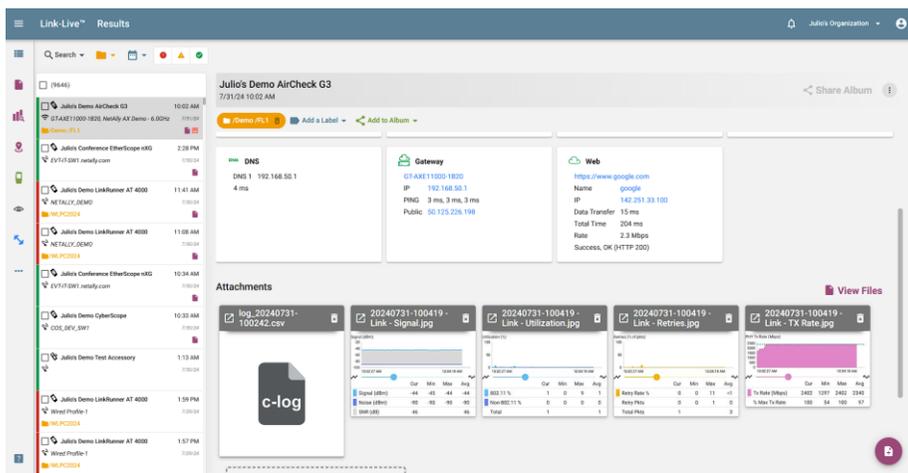
- このリリースから、MACアドレス フィルタリングを使用するネットワークでのWi-Fi 接続テストが迅速かつ簡単になりました。各Wi-Fi接続テストプロファイルにユーザー定義のMACアドレスを設定するオプションがあります。

その手順は以下のとおりです:

- Wi-Fi [自動テスト設定]に移動します。
- ユーザー定義MACアドレスを設定したい Wi-Fi テストプロファイルを選択します。
- [Wi-Fi接続] オプションをタップします。
- [Advanced] オプションを選択します。
- [ユーザー定義 MAC] オプションを有効にし、選択したWi-Fi 自動テストプロファイルで使用するMACアドレスを入力します。



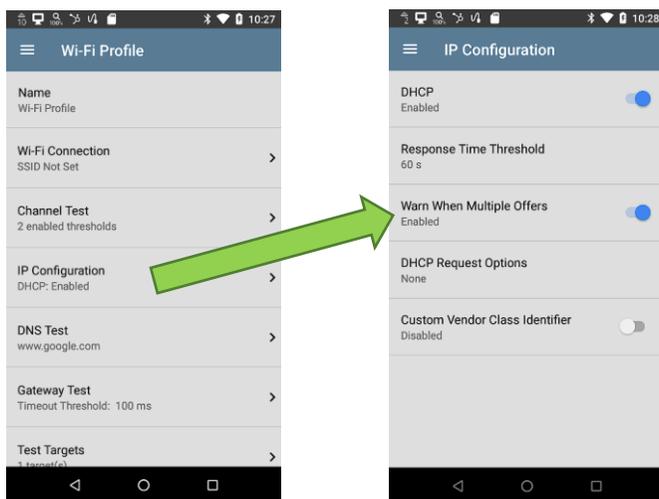
- Wi-Fi 自動テストの結果を解析し、貴重な情報を含むレポートを生成することがより簡単になります。このリリースから、電波品質または Wi-Fi 接続の自動テストで生成された個々のグラフやチャートを Link-Live にアップロードできるようになります。



## 複数のDHCPオファーに関する警告

(すべてのAllyWare搭載製品に適用)

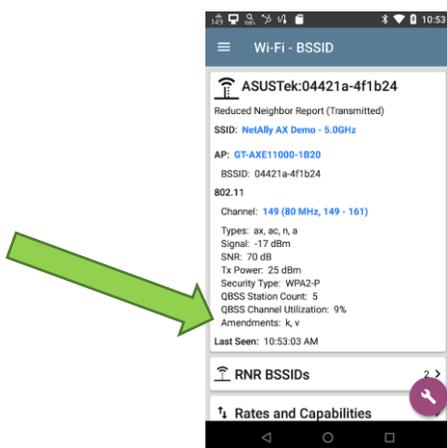
- 接続パフォーマンスの問題や不正な DHCP サーバをより詳細に把握できるようになりました。有線または無線テストの実行中に複数の DHCP オファーを受信した場合、自動テストアプリで警告が表示されるようになりました。このオプションを有効にするには、以下の手順を実行します：
  - 警告を有効にする有線または無線のテストプロファイルを選択します。
  - プロファイルの設定画面に移動します。
  - [IP 設定] オプションをタップします。
  - [Warn When Multiple Offers] オプションを有効にします。



## Wi-Fi アプリの改善

(AirCheck G3, EtherScope nXG, CyberScope, CyberScope Airに適用)

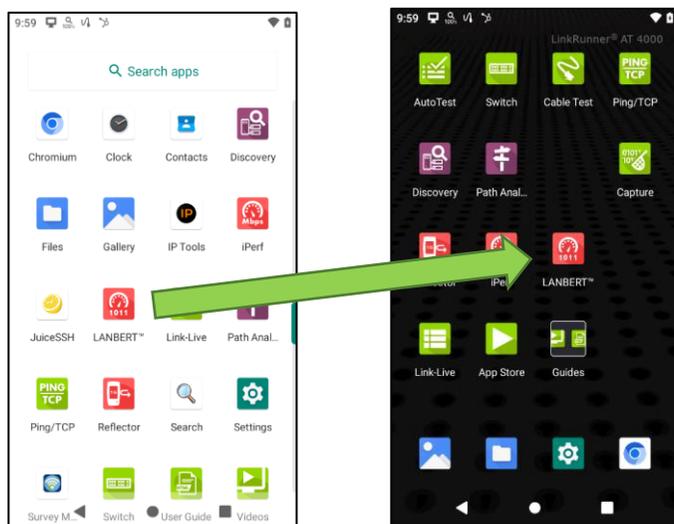
- ネットワークで 802.11k (Neighbor Reports)、802.11v (BSS Transition Management Frames)、または 802.11r (Fast BSS Transition) を使用すると、Wi-Fi ローミング パフォーマンスを大幅に向上させることができます。これらのオプションがすべての AP で有効になっているかどうかをすばやく確認するには、テストの Wi-Fi アプリを使用します。



## 新しい 1G LANBERT メディア アプリ

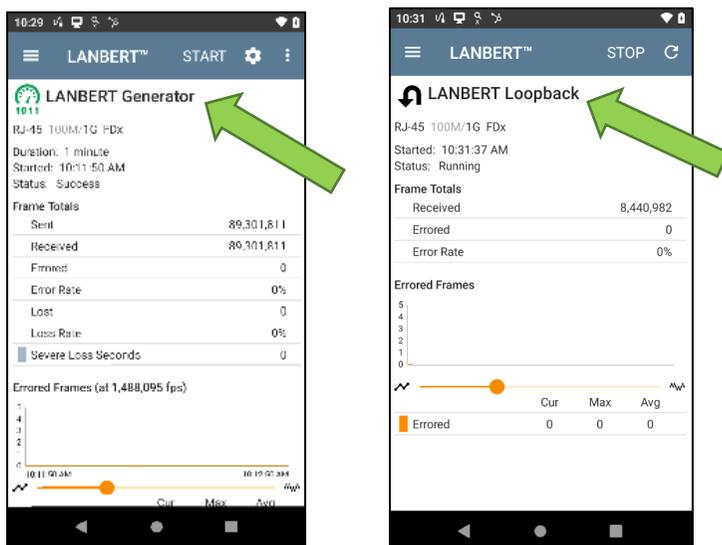
(LinkRunner AT 3000, LinkRunner AT 4000に適用)

- メタル線および光ファイバケーブル設備はネットワークの基盤として機能します。しかし、必要な帯域幅を提供するのに十分な品質であるかどうかご存知ですか？ NetAllyのLinkRunner AT 3000およびLinkRunner AT 4000用の新しい1G LANBERTメディアアプリは、伝送品質と利用可能な帯域幅をシンプルかつ迅速に評価する方法を提供します。LANBERT は、ネットワークケーブル インフラストラクチャ上でラインレート イーサネットフレームの伝送を生成、測定し、光ファイバで1G、メタル線リンクで10/100M/1Gをサポートする能力を検証します。新しい 1G LANBERTメディアアプリを使用すると、以下のことが可能になります：
  - 既存のケーブル設備を最大限に活用
  - 10/100M/1G 用メタル線帯域幅の検証
  - 1G 光ファイバケーブルおよびコンポーネントの検証
  - 最大エラー フリー スループットの確認
- LANBERT テストを長時間(最大24時間)実行することで、ネットワークトラフィックを破損させる可能性のある断続的な問題やノイズイベントの存在を特定する「ソークテスト」として機能します。見やすいトレンドグラフと1秒単位のドリルダウン機能により、LANBERTはエラーの発生を正確に特定するのに役立ちます。
- 新しいアプリを使用するには、まずアプリの選択画面に移動し、LANBERTテストアプリを見つけるまで下にスクロールします。次に、アプリをホーム画面の好きな場所にドラッグします。



- その後、アプリを開いて以下の操作を行います：
  - LinkRunner AT のテストポート(メタル線またはファイバ)の 1つに、検証したいケーブルの片側を接続します。
  - ケーブルの反対側を次の場所に接続します：
    - 最大100Mbpsのテスト用物理ループバック
    - 最大1G テスト用のLinkRunner AT 3000/4000、LinkRunner 10G、EtherScope nXG、CyberScope、または CyberScope XRF
  - LinkRunner AT を LANBERT ジェネレータとして設定します

- 反対側で2台目のユニットを使用している場合は、それをLANBERT ループバックとして設定します。
- テストを開始します。



- LANBERT テストの設定方法または使用方法の詳細については、LinkRunner AT 3000/4000 [ユーザーガイド](#)を参照してください。

## バージョン2.6でのその他の変更点：

- 10Mbps ファイバリンクに対応  
(CyberScope, CyberScope XRF, EtherScope nXG, LinkRunner 10G, LinkRunner AT 3000, LinkRunner AT 4000に適用)
  - このリリースでは、海底および長距離通信に使用される 10Mbps ファイバリンクで実行される試験のサポートが追加されました。
- パフォーマンスアプリの改善  
(CyberScope, CyberScope XRF, EtherScope nXG, LinkRunner 10Gに適用)
  - パフォーマンステストの結果を解析し、貴重な情報を含むレポートを作成することがより簡単になりました。このリリースから、パフォーマンステストの実行後に生成された個々のグラフまたはチャートを Link-Live にアップロードできるようになります。
- HTTPプロキシ名に対応  
(すべてのAllyWare搭載製品に適用)
  - 冗長化のために複数のプロキシサーバが使用されているHTTPプロキシ導入のサポートを改善するために、このリリースから、IPアドレスに加えてプロキシサーバのURLを使用するオプションが追加されました。
- VNC接続の改善  
(AirCheck G3, CyberScope Air, LinkRunner AT 3000, LinkRunner AT 4000に適用)
  - VNCを使用してリモート接続しているユニットがスリープモードになった後でも、スリープ解除できるようになりました。

- **NBASE-Tの検出設定**

(LinkRunner AT 3000, LinkRunner AT 4000に適用)

- LinkRunner AT 3000/4000 で NBASE-T 検出をオンにする方法をご存知ですか？もう迷う必要はありません。このリリースから、デフォルトで有効になります。このオプションを手動で有効または無効にするには、以下の手順を実行します：
  - 自動テストアプリに移動し、NBASE-T 検出設定を変更する有線テストプロファイルを選択します。
  - [有線接続]オプションを選択します。
  - [NBASE-T 検出]オプションを有効または無効にします。

- **ケーブルテストの精度向上**

(LinkRunner AT 3000, LinkRunner AT 4000に適用)

- このリリースでは、ケーブルテスト アプリの機能強化が導入され、短いケーブルまたはパッチコードでの障害および WireView ID 検出の精度が向上します。

- **PoE給電/充電**

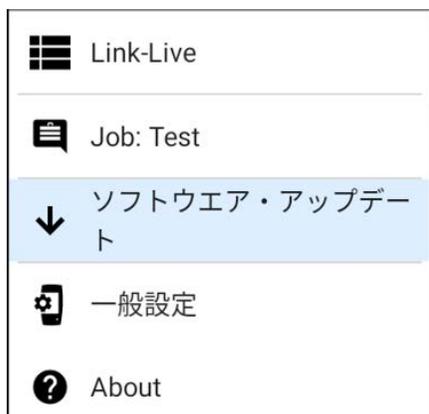
(LinkRunner AT 3000, LinkRunner AT 4000に適用)

- LinkRunner ATには、8時間以上という大幅に延長されたバッテリー駆動時間が含まれています。PoE給電/充電時間の延長は、テストの動作を改善するために変更されました。  
接続性テストやトラブルシューティングの通常操作では、テストはPoEから電源供給と充電を行うため、バッテリー寿命が無制限であることに違いはありません。長期間(24時間365日)運用の場合、PoE給電/充電は熱を考慮して一定期間後に停止されるため、ユニットはUSB-C 給電を必要とします。本機は工場出荷時、PoE給電/充電を無効にするように設定されています。この機能は、一般設定で有効にすることができます。

## Version 2.6へアップグレード

Link-Liveにご登録いただいている場合は、OTA(Over the Air)ファームウェア・アップデートに従うことを強くお勧めします：

1. 利用可能なソフトウェア・アップデートをいつでもチェックするには、ホーム画面からLink-Liveアプリを開きます。
2. Link-Liveアプリで、メニューアイコンをタッチするか、右にスワイプして左側のナビゲーションドロワーを開きます。



3. [ソフトウェア・アップデート]をタップします。ソフトウェア・アップデート画面が開き、利用可能なアップデートのバージョン番号が表示されます。
4. [ダウンロード+インストール]をタッチしてシステムをアップデートします。
5. 完了すると、ユニットが再起動します。